

『夜への長い旅路』

—— オニールが胸に秘めていたもの、兄への挽歌 ——

中矢 美紀

劇作家ユージーン・オニールを外見から捉えたときには、彼は様々な哲学に次々に傾倒した人物ということが言えるだろう。曰く、懐疑主義、社会主義、無政府主義、ニーチェ思想、マルクス主義、仏教思想、ギリシア哲学、進化論等々と数え上げられており、枚挙にいとまがない。『夜への長い旅路』の冒頭のト書には、エドマンド・タイロン（作家オニール自身を描いた登場人物）の本棚の描写があるが、そこに若き日のオニールの精神的遍歴を示す書籍が並べられている。

また、その作品の方面から見れば、彼は野心的な実験演劇作家として知られた。様々な演劇様式を模索し、ドイツ表現派やフロイトの精神分析学の影響を受け、古典と近代との融合を試み、仮面の使用や独白、傍白の活用、意識の流れの手法まで用いて彼の演劇の極みを目指した。また、彼は壮大な劇を目指した。大規模なら大規模である方が良いというようなところがあった。そして、彼はそのような壮大な作品、『喪服の似合うエレクトラ』等の功績により一九三六年ノーベル文学賞を受賞した。しかしながら、時代からは次第に取り残され、「アメリカ近代演劇の父」という栄誉だけを担って、忘却のうちに一九五三年に亡くなった。

晩年、病いと闘いながら完成した原稿『夜への長い旅路』を、オニールは、彼の死後二十五年は発表禁止としたのであるが、三度目の妻で未亡人のカーロッタが早期発表の決断を下したのである。一九五六年になって、ストックホルムで、またニューヨークで死後発表の『夜への長い旅路』が公開されるや否や、オニール・リバイバルで世界は沸き立った。まさに現在に通じる主題——豊かさの中の麻薬やアルコールへの依存、そして心の荒廃——を扱った作品なのである。『長い旅路』は以前の作品群とは異質な戯曲であり、いわばオニールが長い間抱き続けていた真情、あるいは心の傷をことばにした作品であるということが出来よう。家庭崩壊の悲劇が一生彼を蝕み続けていたことがこの作品で明らかにされているのである。

『長い旅路』を見れば、何故彼がカトリックの信仰に疑いをもち（敬虔なカトリッ

ク信者であった母が、モルヒネの禁断症状とは言え、自殺未遂を企てるのを、十五才の時に目撃したことが大きな原因と考えられる)、その代わりの神を求めて一生あらゆる哲学を彷徨しなければならなかった理由がわかるし、野心的な実験作家という表の顔の内面にあった苦悩が明らかにされるのである。彼の作品を彩る深い絶望や「人間に対する病理学的軽蔑」⁽¹⁾という批評も納得されるだろう。『長い旅路』でオニールは、彼の心の奥底の傷を描いているのだ。その最も大きな傷は、自分の存在が慕っていた兄を悦ばせるのではなく苦しませていたことであり、それがオニールが生涯もち続けたコンプレックスであると思われる。『夜への長い旅路』はやがて、他のオニールの歴史的な作品群から離れて、アーサー・ミラーの『セールスマンの死』やテネシー・ウィリアムズの『欲望という名の電車』と並んで、アメリカの三大悲劇の一つとまで目されるようになる。

『長い旅路』は彼の実際の家庭の劇である。家族四人がそれぞれに懊悩を抱え、恨みと慈しみの台詞を繰り返す痛ましい劇である。父ジェイムズ・タイロンはシェイクスピア俳優として優れた才能に恵まれながら、商業演劇に身を売って金を稼ぐことでそれを磨りつぶしてしまったことを深く後悔している。母メアリーは興行の旅暮しが合わず、三男のエドモンドを産んでから医者への勧めたモルヒネに頼るようになり、今は完全な中毒患者となっている。父がジェイムズ・ジュニアと名付け、学校でも将来を嘱望された長男のジェイミーは弟のエドモンド（もう一人弟がいたのだがジェイミーが移したと疑われるはしかで亡くなっている）を母に取られると嫉妬し、また母のモルヒネ中毒を知ってから放蕩三昧に耽るようになってしまった。十歳年下のエドモンドは彼に酒色の味を教えられ、また兄同様学校を追われ、その後船乗りとして航海した経験をもつが、今は地方新聞の記者として身を立てようとしている。だが、母親譲りの神経質な体質に無茶で自暴自棄な生活が祟って結核の診断が下される。

四人ともに救われない人々である。けれども誰を責めることも出来ない。しかし、劇中では責任の所在が問われ続け、責め合いが凄惨に繰り返されることになる。

しかし、このうちで最も救いのない強い悲劇性を帯びた人物を選ぶとしたらジェイミーであるかもしれない。そのように見る批評家は少ないが、『長い旅路』の真の主人公は兄のジェイミーではないだろうか。後述するようにエドモンドは父の吝嗇に対しては容しを与えている。しかし、ジェイミーの告白に対しては、聞きたくない、と懇願している。そこにエドモンド（作者オニール）の心の悲鳴が聞こえるのではないだろうか。エドモンドの衝撃の大きさと兄の苦悩の深さが窺われる。母に対しては子として心配を募らせることができるだけである。

オニールは『長い旅路』を書いたのちに、架空のジェイミーの劇『廃者の月』を

書いて彼の魂を慰めようとしている。『長い旅路』のジェイミーが行き着いた先は救い難いアルコール中毒とそれによる死であった。『長い旅路』の彼にその萌芽が見られるのである。

メアリーは父ジェイムズの非難からジェイミーを庇ってやるが（第一幕）、それは母親としての役割を取っているということであって、エドモンドに対するように溺愛するというのではない。ジェイミーが次男ユーージンにはしかを移して死なせたと信じ、心の底では赦していないのである。ジェイミー自身もそれを感じていることが彼の悲劇であろう。メアリーがモルヒネに戻ったことを最初に悟るのはジェイミーである。彼はそれほど母を気に懸け、注意深く見守っているのだが、実際に口をついて出る母への悪口のために父や弟から咎められたり、殴りかかられたりしてしまう。

弟のエドモンドの病気を最も深刻に受け取め、心配しているのも彼である。第一幕でエドモンドが退場した後、エドモンドは単なる夏風邪だと言い張るメアリーに父のジェイムズは同調する。結核と知っているジェイミーは母が去った後、一流の医者に診せてやらず、メアリーを刺激したくないからといって、エドモンドの病気は風邪だと言いくるめる父を非難する。また、ジェイミーは家族の誰からも殆ど触れてもらうことがない。第一幕で母を気遣い、労わることばも拒絶されて傷つく。彼を慰めるのは太った売笑婦ヴァイオレットだけである。

彼に比べれば、父のジェイムズは、第四幕でエドモンドと語り合ううち、初めて、彼の吝嗇が幼時の苛酷な貧しさから来ていることを理解してもらい、金のために才能を潰してしまった後悔と無念さを打ち明けることが出来る。そして、エドモンドは父の吝嗇を理解し、自分が安い療養所に送られることも納得してしまう。

母のメアリーはモルヒネに逃避して現実を忘却し、幸せだった少女時代に没入してしまう。彼女は利己的で復讐心が強く無責任だと言う批評家もいる⁽²⁾。

エドモンドはまだ若く、父に嘱望され、母には「一家の赤ちゃん」として甘やかされている。

四人を安易に比較することは無意味であるが、家族の中で疎外され、最も醒めており、深い傷を負って痛みに耐えているのはジェイミーではないかと考えられるのである。

エドウィン・ミューアが述べる劇文学の見事な作品がもつ特徴が『長い旅路』には備わっている。即ち、

形式のととのった劇のうちには劇的小説のうちに見出だされるような諸性質が純粹な状

態で存在しています。一つの場面に限定すること、登場人物を外の世界から孤立させること、終局を目ざして展開してゆく発展や争闘や解決など・・・⁽³⁾

場所はタイロン家の夏別荘に限定され、一家は外の世界から孤立している。この点はアイルランド系である一家が町のヤンキーの人々から疎外されていることが象徴的にあらわしている。一見、平和で幸福そうな一家の仮面はすぐに剥がされ、四人のタイロン家の人々の業とも言うべき、それぞれの欠陥が露わになってくるとともに、台詞や表情、動きで示される登場人物間の葛藤場面が次々に現れる。

劇の初めに登場するのは理想的な初老の夫婦像であり両親像である。花形役者として鳴らした若々しい夫と療養所から戻ったばかりで健康を取り戻した美しい妻。二人はふざけ合い、夫は妻の腰に手を当てて仲睦まじそうである。息子たちも仲良く笑い合っているのが聞こえる。一見、タイロン家の四人の平和で穏やかな初夏の朝である。こうして、父親が朝食後の葉巻きを満足げにくゆらせ、二人の息子たちの笑い声が聞こえる暖かな家庭に、先ず、下の息子のエドモンドの咳き込む音にメアリーが動揺して最初の不吉な兆候がもたらされる。

しかし、オニールは草稿に手を加え⁽⁴⁾、この作品を悲惨なだけのものから救ってもある。一家は四人でエドモンドの話に興じ、二番女中キャスリーンは観客の笑いを誘う気の利かないアイルランド娘であり、タイロン家の人々に好意を寄せている。暗澹たる状況の中で、それでも家族は互いを宥し、慈しみ合う様も描かれる。

だが、それだけに、終幕、その夜、父とエドモンドが腹藏なく語り合い、次いで、泥酔したジェイミーがエドモンドに、自分は嫉妬心から彼を放蕩の道に誘い込んだ、自分とはもう手を切れ、と告白してうとうと眠りについたところで、突然メアリーがシャンデリアの灯りを煌々とつけて、たどたどしくピアノを弾き始める場面は衝撃的である。劇の初めの優しく魅力的な初老の母親は姿を消して、メアリーの心は、すっかり、幸せだった修道学校の女学生に戻ってしまっている。彼女をそれぞれに愛する三人の男たちは呆然とするばかりである。ミュアの言う劇の終局がショッキングに鮮やかである。

さて、第一幕では、既に述べたように、エドモンドの聞いてきたエピソードが皆を笑わせる。タイロンのアイルランド人の小作人であるショーネシーが、フェンスが壊れたので飼っている豚を隣人の石油王ハーカーの採氷用の池で泳がせ、水を自由に飲ませた、というのである。誰がフェンスを壊したかは明らかにされないが、ショーネシーであろうと想像される。ハーカーが文句を言いに来たところ、わざとそちらが塀を壊して、大切な豚たちを肺炎に罹らせたショーネシーは開き直ったというのだ。父のジェイムズは面倒が起こるかもしれないと危惧しながらもアイル

ランドびいきで痛快に思う。メアリーもショックを受けながら笑わずにはいられない。「アイルランドの王」ショーネシーがアメリカの大金持ちに逆振じを食わせるというこの話は『廃者の月』でも繰り返されて、ジェイミー（ジム）はショーネシー（ハウガン）の娘の寝室に隠れて一部始終を聴き、大笑いすることになるのである。）しかし、父と息子たちの関係はお定まりの対立に発展し、エドモンドは二階へ去る。そこでジェイミーは弟はひどい病気だと心配して言うのだが、両親は相手にしない。やがてメアリーが一番女中ブリジット（劇中には登場しない）に指図するため調理場へ去ったあと、タイロンとジェイミーの間に争いがおこる。ジェイミーが、最初に安い藪医者にエドモンドを診せたからエドモンドが結核に冒されたのだと非難すると、じゃあ、おまえはちっとも仕事に身を入れず、有金はたいて使ってしまうとタイロンが応じる。親にとって子供が自慢の種にならないという不満がジェイミーに直接的にぶつけられている。ジェイミーの中でエドモンドをめぐる愛憎と嫉妬が交錯する。

二人の退場後、続いて登場するメアリーとエドモンドも互いに勞わり合いながら、つい、相手の痛いところに触れてしまう。タイロン家の男たちが家族的な付き合いを好まないとメアリーが不満を洩らすと、エドモンドはメアリーもそうだと云い、暗にメアリーの麻薬中毒を示唆する。メアリーはエドモンドがほんの夏風邪をひいただけだと主張する。メアリーはエドモンドが去ると安堵し、リラックスするが、突然また緊張し、パニックに陥る。メアリーの内面で何が争い合っている。この謎のような場面は、次幕で明らかになる彼女のモルヒネへの再度の逃避の伏線となっている。ミステリー劇の体裁は実は禁断症状の描写なのである。

第二幕第一場は霧も晴れて明るい陽気。タイロンとジェイミーは庭の垣根を直している。先に戻ったジェイミーはエドモンドが母を長時間一人にしておいたことを責める。昼食前、メアリーは降りてきて、

人生が私たちにしたことはどうにもならないの。

とモルヒネの効果で超然として云う。ジェイミーだけがいちやく母のモルヒネの使用を察する。昼食時、メアリーの異様な様子にタイロンとエドモンドも彼女がモルヒネに戻ってしまったことを悟る。

第二幕第二場は昼食後。しかし、タイロンは劇の始まりのようにメアリーに触れようとも見ようともしない。医者ハーディから電話がかかり、エドモンドの病気が深刻なものであることが示唆される。メアリーはタイロンとの遣り取りで次のように漏らす。

過去は現在でも未来でもあるのよ。

メアリーを置いて町へ出掛けてゆく三人の男たちを見送り、ここはなんて淋しい、と云いながらモルヒネのことで詰られないから一人の方が良い、とメアリーは嘯く。

第三幕は霧に包まれた宵である。メアリーは二番女中キャスリーンを相手にとりとめなく自分の境涯をしゃべる。キャスリーンは女主人に好意を抱いているが、午後のドライブのとき、薬屋に寄ってメアリーの処方箋で買物をさせられた際に、店の者に失礼な態度を取られたと不審に思っている。キャスリーンが一番女中ブリジットの手伝いに戻って行くと、メアリーは自分がカトリックの信仰を失ってしまったことを嘆く。意外にもタイロンとエドマンドが帰って来る。その気配にメアリーは自分は一人でいたかったのに、と独り言を言うが、次の瞬間には帰ってきてくれて嬉しい、と内面の矛盾が描かれる。

メアリー不在の第四幕始め。長い一日の夜が訪れ、そこでは父と兄の二人の男たちの初めての心からの告白がエドマンドを聞き手にしてなされ、父に対しては許しと理解が与えられる。続いての兄のジェイミーの告白は、エドマンドにとって聴くのが辛く、恐ろしいものであった。

ジェイミーが終電で帰ってきた様子を察して父はポーチへ出てしまう。酔ったジェイミーの舌は蛇のように辛辣で自分は痼癪を起こしてしまうだろうと言うのである。ジェイミーはここでも父に背を向けられる。彼はひどく酔っ払っており、父の客舎から玄関の灯りが消されているため、エドマンド同様のものにぶつかり、転びながらはいってくるのでエドマンドは苦笑する。ジェイミーは自分が買った太った売春婦ヴァイオレットの話をしてエドマンドを笑わせるが、母のことに触れてあの麻薬患者はどうした、と尋ねてエドマンドに殴られる。しかし、ジェイミーは、今度こそ母がモルヒネ依存を克服したと信じて自分も更生しようとしていたと語って啜り泣いてしまう。エドマンドも流石に怒りを忘れて彼の腕を軽く叩いて慰めようとする。ジェイミーの長広舌は続く。エドマンドが新聞に掲載した詩を軽んじてみせたあとで、エドマンドは自分が創ったものだ、自分のフランケンシュタインだ、と言う。「フランケンシュタイン」というジェイミーのことばに兄の弟に対する救いがたい罪の意識とサディスティックな感情が込められている。次いで、胸の内をぶちまけるかのように、このことばのもつ真の意味を明らかにする告白を始める。彼の告白は劇の大きなクライマックスとなるものである。

なあ、エドマンド、お前は（療養所へ）行っちまう。もう話す折がないかもしれない。本当のことを話せるほど酔っ払うこともないかもしれんしな。もうずっと前におまえに

話しておかなきゃならなかったことさ——おまえ自身のためにな。・・・真面目に聴けよ。用心しろって言うことだよ——この俺に。ママとパパの言う通りさ。俺は酷い悪影響だった。しかも最悪のことは、わざとやったって言うことさ。

しかし、エドモンドはジェイミーの言葉を真っ向から受け止めることが出来ず、「やめてよ。聞きたくない——」と何度も遮ろうとする。父の告白に対して、話してくれて嬉しい、と応じたのとは対照的である。

おまえを駄目にするためにわざとやったんだ。それは俺の一部かもしれない。でも大きな一部さ。ずっと昔に死んだ部分だ。人生を憎んでいる。おまえを賢くして俺の間違ひから学ばせるんだと自分でも信じたこともあったよ。でもそいつはインチキだ。酔っ払うことをロマンチックだと思わせた。本当は貧しくて愚かで病気の薄汚い売春婦どもを魅惑的なヴァンプだと思わせた。働くことをお目出度い連中のやることだと思わせた。おまえが決して成功しないように。そうすれば比較されて俺が一層惨めに見えるだろうから。いつだっておまえが妬ましかった。ママの赤ん坊でパパのお気に入り。それにおまえが生まれたからママはクスリをやり出したんだからな。おまえのせいじゃないことはわかっているさ、だけど同じことだ。おまえを憎まずにはいられない。・・・でも間違うなよ、坊や。俺はおまえを憎む以上に愛しているんだからな。今しゃべっているのがその証拠さ。おまえが俺を憎むかも知れないという危険を冒して——おまえは俺に残された全てなのに。・・・（訳、筆者）

ジェイミーの台詞の中にある「憎んでいる以上に愛している」ということがタイロン家の悲劇を代表するジェイミーの悲劇の核となるものかもしれない。ヒンデンによると、「愛」ということばは劇中六十回以上使われるのに対して「憎しみ」ということばは三十回に満たない程度現われるという⁽⁵⁾。「愛」ということばが多く使われながら現実には悲劇に終わっている。宗教的な愛では救われなくなったタイロン家の人々の悲劇が象徴されているのではないだろうか。

ジェイミーは長い告白を終えてうとうとする。告白して気分が良くなった、と最後に言うのだが、ジェイミーは本当には救われない。エドモンドは驚愕して聞いていただけである。ジェイミーの現実は何も変わらないのである。オニールは、四人のものに取り付かれたタイロン家の人々に理解と宥しを与えるためにこの劇を書いた、と妻に宛てた有名な献辞で述べているが、ジェイミーに対しては当時の自らの理解の限界を悔いて許しを求めているのではないだろうか。

ともあれ、『長い旅路』ののち、オニールはもうへぼ詩人——エドモンドが劇中自嘲して云ったことば——のように吃らなくなった、とブルースタインは述べて

いる⁽⁶⁾。この作品で彼は自らにふさわしい音楽的な文体を見出だしたと言われる。この作品以後、かれのユーモアも表面にあらわれ、冴えわたるようになるのである。それは、彼が、長年心の中に秘めていた、自分の成長期にともに生きた家族の苦悩を初めて表現し得て、自らの心を開放することが出来たということではないだろうか。

注

- (1) "Counsels of Despair," *The Times Literary Supplement*. April 10, 1948.
The Times Publishing Company, limited. Rpt. in *O'Neill and His Plays: Four Decades of Criticism*. eds. Oscar Cargill et al. (New York: New York University Press, 1961), 374.
- (2) Floyd, Virginia. *The Plays of Eugene O'Neill: A New Assessment*. (New York: The Ungar Publishing Company, 1987), 542.
- (3) エドウィン・ミュア「小説の構造」(1928)佐伯章一訳(ダヴィッド社), 137.
- (4) Hinden, Michael. *Long Day's Journey into Night: Native Eloquence*. (Boston: Twayne Publishers, 1990), 90.
- (5) *Ibid.*, 36.
- (6) Brustein, Robert, "The Theatre of Revolt," (1964) Rpt. in *Eugene O'Neill's Long Day's Journey into Night*. ed. Harold Bloom. (New York, Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1987), 32.